

松岡正子・黄英哲・梁海・張学昕編

歴史と記憶

——文学と記録の起点を考へる

（あるむ、二〇一七年一月、二九六頁）

第一次世界大戦の前夜、セルビア王国は、オーストリア・ハンガリー帝国から突き付けられた最後通牒の一部を、主権侵害であると留保した。周知のとおり、その結果、戦端の幕は開かれた。

ここでむしろ注目したいのは、第一項から第四項までが、セルビアにおいて反オーストリア思想を助長する要因を排除せよとの要求で占められている点である。帝国主義国家オーストリアは、被支配者の意識こそが統治を阻害する最大要因だと見抜いており、さすは植民地経営の巧者である。

とりわけ第三項は、反オーストリア思想をセルビアの公教育から排除するよう迫る。被支配者は、支配者の言語をもって「国民意識」を上書きされた想像の共同体として、支配が正当化さ

れた「わが国」の歴史を記憶する。

本書のテーマは、歴史を記録し記憶することであり、そして記憶から紡ぎだされた記録としての文学をめぐる視座である。そこに、言語という媒介の意味を問う姿勢が明示される。つまり本書は、これらの諸相を学術的に連結することで、一定の人間関係のなかで醸成された文化を問うている。

なぜなら文化とは、人間の社会的経験における明示的な、もしくは暗黙的な言動パターンで構成され、象徴によつて伝達された所産であるからだ。

換言すれば、文化とは日常のなかで私たちが意識的・無意識的に従う規範であり、言語、文字や音楽といった社会的媒介に加えて、一定の人間関係で共有される社会的な分類である。なお、

ここでいう分類には、すべてを白黒はつきりさせることに限らず、「あいまいさ」を重視する場合も含まれる。

その一方で、人間は自己保存にこそ最高のプライオリティを置くもので、一七世紀の哲学の巨人トマス・ホッブ

ズは、そうした人間関係の相克を「万人の万人に対する闘争」と称した。さらに彼は、それが人間にとつてきわめて当然のことであり、まさに自然状態なんだと主張した。人間が比較優位を通じた自己肯定によつて安心感を得ようとするのは、誰も自信が無いからだ。だからこそ私たちは、ともすれば自らの人種やコミュニティ文化を至上とする思想（エスノセントリズム）に陥つてしまい、往々にして独善的な排外性を是認するものである。

福沢諭吉は、「人間の交際」を豊かに発展させる「自由の精神」の要素のひとつに、多様な異なる見解を議論しあう「多事争論」を挙げた。曰く、「自由の気風はただ多事争論の間にあり」。日中両国・社会・人間関係の間に多様に存在する「常識的規範」をめぐり、文学と歴史という二つのフェーズで大いに議論した成果論文が、本書に収められている。日中平和友好条約締結四〇年を迎えた今日、改めて私たちの自然状態を問うた書である。（加治宏基）